

体育授業における回避的態度と学習成果との関係

當山，貴弘

<https://hdl.handle.net/2324/7182275>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士（教育学）, 課程博士
バージョン :
権利関係 :



氏 名 : 當山 貴弘

論 文 名 : 体育授業における回避的態度と学習成果との関係

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

【研究の背景と目的】

体育授業における回避的態度は、運動技能の低さを理由とした回避的態度（例：「運動がうまくないので、言われたことができなくても仕方がない」と心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度（例：「仲間に笑われるので、自分から練習しようとしない」）が存在する。体育授業において運動課題を回避し続けることは、授業参加による能力の獲得を不確実なものにしたり、適切な課題設定ができず、成功体験を減少させたりする可能性がある。また、体育授業の教育目標を達成するために、優れたカリキュラムや指導法を用いたとしても、学習者がそれに取り組もうとしなければ、十分な学習成果は得られないと考えられる。

ところで、体育授業において育むべき資質・能力として「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」がある（文部科学省，2018）。特に、「学びに向かう力・人間性等」については、体育という教科において重要視されており、他教科とは異なった期待がかかっている（神奈川県立体育センター，2018）。當山ほか（2021）は、この「学びに向かう力・人間性等」にかかる学習成果として学習方略を取り上げ、体育授業における回避的態度との関係を検討している。その結果、体育授業における回避的態度が「学びに向かう力・人間性等」にかかる学習成果を低下させる可能性があることを示唆した。しかしながら、この研究は、体育授業における回避的態度を独立変数、学習成果を従属変数に附置したモデルの検討であり、「学びに向かう力・人間性等」にかかる学習成果を獲得するプロセスにおいて、回避的態度がどのように関わるのかについては検証されていない。また、体育授業における回避的態度と「学びに向かう力・人間性等」にかかる学習成果との因果関係についても、明らかにされていない。

以上のことから、本論文では、「学びに向かう力・人間性等」にかかる学習成果として体育適応感と運動有能感を取り上げ、体育授業における回避的態度が学習成果獲得プロセスとどのように関わっているのかを明らかにすることを目的とした。第1章では、体育授業の好意度、回避的態度、体育適応感との関係について検討した。第2章では、3時点の交差遅れ効果モデルに基づいて、体育授業における回避的態度と運動有能感の相互影響関係について検討した。

【結果の概要】

- 1) 体育授業に対する好意度は、心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度を低下させ、この回避的態度の低下は、体育授業内の仲間との対人関係に対する適応感と体育授業の学習内容や教師との関わりに対する適応感の向上と結びついていることが確認された（第1章）。
- 2) 小学校高学年男子では、心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度が、努力すればできるという有能感に負の影響を及ぼすことが確認された。また、小学校高学年女子では、運動技能の低

さおよび心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度が、仲間から受け入れられているという有能感を低下させ、その有能感が低下することによって回避的態度が増長するという負の循環的な影響関係が認められた。加えて、小学校高学年の男女ともに、運動技能の低さを理由とした回避的態度が、努力すればできるという有能感を低下させることが、また、運動能力に対する有能感は、運動技能の低さおよび心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度を低下させることが示された。一方、中学1年生男子は、運動技能の低さおよび心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度が、全ての種類の運動有能感（身体的有能さの認知、統制感、受容感）を低下させ、その運動有能感が低下することによって、回避的態度が増長するという負の循環的な影響関係が示された。また、中学1年生女子では、運動技能の低さを理由とした回避的態度が、運動能力に対する有能感および仲間から受け入れられているという有能感を低下させ、それらの有能感が低下することによって運動技能の低さを理由とした回避的態度を増長するという負の循環的な影響関係が確認された。中学1年生女子ではさらに、心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度は、仲間から受け入れられているという有能感を低下させることが、また、運動能力に対する有能感と努力すればできるという有能感は、心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度を低下させることが示された（第2章）。

【まとめ】

第1章では、体育授業に対する好意度、回避的態度、体育適応感の関係について検討を行った。その結果、体育授業内の仲間との対人関係に対する適応感と体育授業の学習内容や教師との関わりに対する適応感の両方の低下を防ぐためには、特に心理・社会・身体的要因を理由に回避的態度を示す学習者への配慮が必要であることが示唆された。

第2章では、交差遅れ効果モデルに基づいて、体育授業における回避的態度と運動有能感の相互影響関係について検討を行った。その結果、小学校高学年において、男子では努力すればできるという有能感を、女子では仲間から受け入れられているという有能感をそれぞれ低下させないためには、回避的態度を抑制する必要があることが示唆された。また、中学生男子では、運動有能感を低下させないためには、基本的に回避的態度を抑制する必要があることが示唆され、一方で、中学生女子では、運動能力に対する有能感には、運動技能の低さを理由とした回避的態度を、仲間から受け入れられているという有能感を低下させないためには、運動技能の低さを理由とした回避的態度および心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度を、それぞれ抑制する必要があることが示唆された。

【今後の課題】

- 1) 本研究では、「学びに向かう力・人間性等」にかかる学習成果を獲得するためには、体育授業における回避的態度を抑制する必要があることが示唆された。しかしながら、実際の学校現場において、多項目からなる質問紙を用いた調査等を通じて回避的態度を抱く者を捉えることは必ずしも容易ではない。そのため、学習者の行動的な特徴から回避的態度を抱く者を把握するための方法について検討することが必要であると考えられる。
- 2) 本研究では、体育授業における回避的態度や体育適応感、運動有能感という個人内の要因に着目したが、学習内容や指導方略を加えた検討を進めることによって、体育授業における回避的態度が体育適応感や運動有能感に及ぼす負の影響を緩和させるような学習環境づくりを提案できるようになると考えられる。